

## 3月号 病害虫防除

佐賀県果樹試験場病害虫研究担当 池田亜紀

いよいよ果樹類の萌芽～発芽時期となり、今年の栽培管理作業も本格的に始まります。冬期にやるべき病害虫対策はできていますか？十分にできていない場合は、今からでも急いでやりましょう。

病害防除では発芽前から生育初期の防除対策が特に重要です。今年は暖冬傾向で推移しており、例年より発芽が早まる可能性がありますので、防除適期を逃さないよう注意します。また、薬剤散布は、風が弱く天気の良い日に行いましょう。

### 【果樹類全般】

(伝染源の除去)

伝染源の除去は、生育期間中の病害の発生を抑えるために非常に重要な作業です。被害枝・葉の除去、せん定枝等の処分、落葉処理などがまだできていない場合は、必ず取り組んで下さい。

### 【露地カンキツ】

(かいよう病対策)

かいよう病は、発芽前～5月の初期防除が大切です。特に発芽前の防除(例年3月上旬頃)は重要であり、防除時期を逃さないよう注意します。また、本年は平年よりかいよう病の菌密度が高いと予想されます。かいよう病に弱い中晩柑類では、IC ボルドー66Dの60倍等を発芽前に必ず散布します。

温州ミカンでも前年にかいよう病が発生した園や幼木園、高接園などでは、必ず散布を行って下さい。ただし、発芽直前は落葉を生じやすいので、樹勢が低下している樹や気温が平年より高く経過し散布時に低温となった場合には、発芽直前の散布を避け、4月以降に防除を徹底しましょう。

(黒点病対策)

伝染源となる枯れ枝のせん除やせん定枝の除去・処分を徹底します。また、間伐した場合の切株も黒点病の伝染源となるため、抜根するか肥料袋を被せる等の対策をします。

(カイガラムシ類対策)

前年にカイガラムシ類が発生した園において、1月上旬までにマシン油乳剤を散布できていない場合は、発芽前の3月上旬にマシン油乳剤97%80倍を散布して下さい。その際、かいよう病対策で使用する銅剤との混用や近接散布は避け、散布間隔を2週間以上あけて下さい。なお、マシン油乳剤と銅剤のどちらを先に散布するかは、かいよう病が問題となる中晩柑では先に銅剤、温州ミカンの極早生や早生でかいよう病が前年発生しておらず、かいよう病の問題が少ない園地等ではマシン油乳剤を散布する等、優先順位に応じて選択してください。

ただし、樹勢が低下した樹に散布すると落葉を助長する可能性があるため、マシン油乳

剤の散布は控えます。また、マシン油乳剤の散布後に低温に遭遇した場合にも落葉助長等の悪影響を及ぼす可能性があるため、低温が予想される場合もマシン油乳剤の散布は控えます。いずれの場合も生育期間中の薬剤防除を徹底して下さい。(令和2年度 佐賀県施肥・病虫害防除のてびき VIII果樹の病虫害防除 P253～256「カンキツ・カイガラムシ類」<http://www.pref.saga.lg.jp/kiji00322074/index.html> 又は佐賀の果樹 2019年7月号 P16～17「古くて新しいカンキツ害虫 カイガラムシ類～ヤノネカイガラムシ～」<http://www.pref.saga.lg.jp/kiji00322997/index.html> をご参照下さい。)

## 【ナシ】

(発芽前の病害防除対策)

黒星病菌は展葉直後から感染し始めますので、発芽直前にキノンドーフロアブル 1,000倍を散布します。

スピードスプレーヤーで散布する場合は、全列走行でゆっくり散布して下さい。

(苗木植え付け時の白紋羽病対策)

苗木を植え付ける場合には、必ず接ぎ木部を露出させるように盛り土し、植えてください。万が一、白紋羽病が発生した場合に、根部を露出させる作業や病気の観察が簡単にできます。

また、植え付け時にはフロンサイド SC 500倍液を植え付け箇所(半径50cm程度)に灌注器などを用いて50L/樹処理して下さい。

## 【ブドウ】

(黒とう病対策)

昨年は、一部で黒とう病の発生が多かった園が見られました。本病は、萌芽直前から萌芽極初期の防除が重要です。この時期に、キノンドーフロアブル 600倍を散布して下さい。

(晩腐病対策)

発芽前にヨネポン 100倍を散布します。

## 【ウメ】

(黒星病対策)

3月中旬にフロンサイド SC 2,000倍を散布します。なお、フロンサイド SCは、4月中旬以降に散布すると果実に日焼けに似た症状の薬害を生じますので、この時期のみの散布とします。

(かいよう病対策)

開花前から花殻離脱開始前までの防除が重要です。この時期に、IC ボルドー66Dの50倍またはZ ボルドー 500倍を散布します。両剤とも幼果期に使用すると果実に薬害を生じることがあるので、使用する時期は厳守します。

幼木では、かいよう病が多発すると、その後も発生が続き防除が困難となるので、幼木期の防除を徹底しましょう。

## 【モモ・スモモ】

### (細菌病対策)

露地栽培において、モモではせん孔細菌病、スモモでは黒斑病対策として、開花直前にIC ボルドー412 30 倍を散布します。展葉後に散布すると薬害（葉やけ）を生じますので、使用する時期に注意して下さい。

### (縮葉病・ふくろみ病対策)

発芽前（出蕾）前の薬剤散布は済んでいますか？まだ散布されていない場合は早急の実施して下さい。

薬剤は、石灰硫黄合剤 7 倍を発芽（出蕾）前までに散布します。その他の薬剤を散布する場合は、モモではキノンドー水和剤 40 500 倍や、チオノック（トレノックス）フロアブル 500 倍、スモモではチオノック（トレノックス）フロアブル 500 倍が使用できます。

散布ムラがあると、防除効果が著しく低下するので、散布ムラが生じないように丁寧に散布しましょう。特に、枝先は薬剤がかかりにくいので、様々な方向（3～4 方向）からしっかりと散布して下さい。

## 【キウイフルーツ】

### (かいよう病対策)

発芽前まではIC ボルドー66D 50 倍等を使用し、発芽後はコサイド 3000 2,000 倍（クレフノン 200 倍加用）等を使用して防除を行います。かいよう病が発生していない園でも必ず防除を行きましょう。

枝や幹からかいよう病によると思われる白色～赤褐色の樹液の漏出がある場合は、発見次第早急に切除して下さい。本病に対する抵抗性は品種ごとに差があり、被害切除部位についても対応が異なります。そのため、被害切除部位の判断が難しい場合、また発芽期以降に葉や新梢、花蕾にかいよう病に酷似した症状が見られ、判断に迷う場合には指導機関等に相談してください。

ちなみに、かいよう病に対する抵抗性がやや強い「ハイワード」では、樹液漏出が見られる場合には、樹液漏出箇所から褐変が見られなくなる位置まで遡って枝を切除します。切り口にはトップジンMペーストを塗布し、切除した枝は土中に埋めるなど適切に処分して下さい。



写真1 赤褐色の樹液の漏出



写真2 葉の褐色斑

(キクビスカシバ対策)

3月下旬頃から幼虫が孵化し、新梢に食入します。3月中下旬と4月上旬の2回、フェニックスフロアブル4,000倍を散布します。

幼虫が枝内に入ってしまうと薬剤を散布しても効果が期待できないため、散布時期が遅くならないよう注意して下さい。

※キウイフルーツの防除では、品種によって使用できる薬剤が限られているため、防除暦を確認して薬剤を選択して下さい。